

めん羊の慢性銅中毒発生群の肝機能モニタリング

【 目的 】

めん羊は、他の家畜と比較して肝臓の銅排泄能力が低いことから、めん羊以外の家畜用配合飼料等の給与を原因とした慢性銅中毒の発症が起こりやすいことが知られています。今回、慢性銅中毒と診断されためん羊の同居群について、原因飼料の給与停止後の予後を判定するため、肝機能及び血中銅濃度を定期的にモニタリングしました。

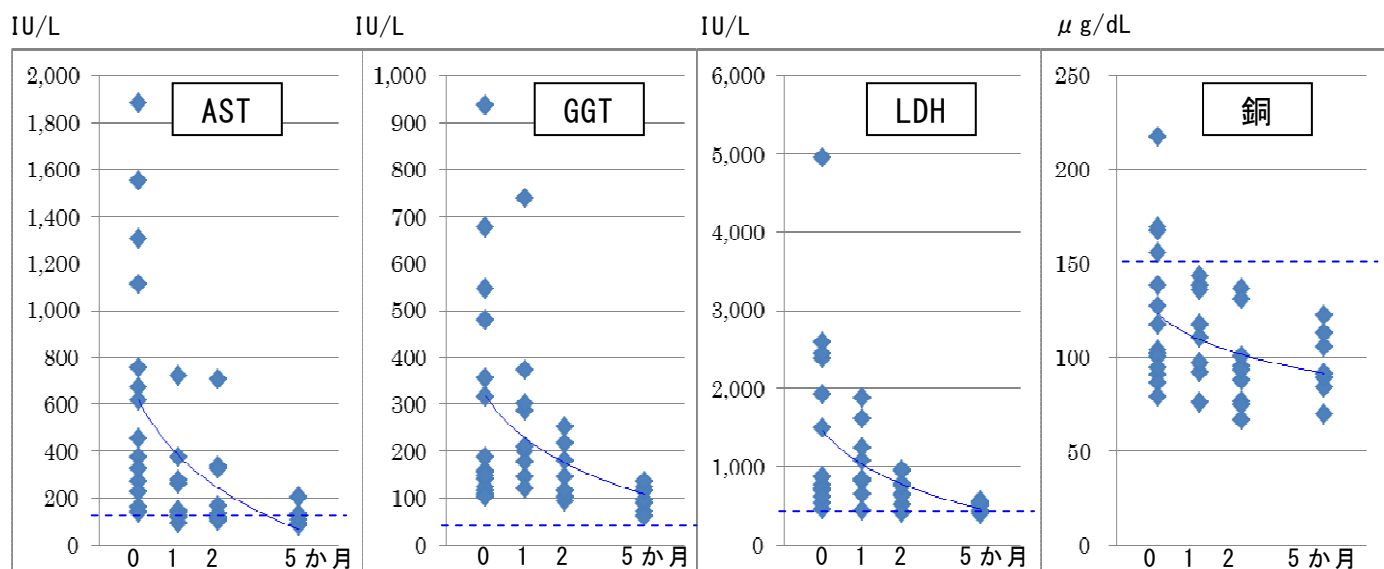
【 成績の概要 】

● 材料及び方法

本病発生農場において、発生時及び原因飼料の給与停止後 1、2 及び 5 か月後に繁殖雌から採血し、肝酵素活性値（AST、GGT、LDH）及び銅濃度を測定しました。また、発生時給与されていた牛用濃厚飼料及び本病発生後に入手しためん羊専用飼料について、銅濃度を測定しました。

● 結果及びまとめ

本病発生時、給与されていた牛用濃厚飼料の銅含量（22.4ppm）は、めん羊の飼養標準における養分要求量の約 3 倍であり、発症めん羊の同居群の肝酵素活性値及び血中銅濃度は正常値を大きく上回っていました。銅含量 9.6ppm のめん羊専用濃厚飼料に変更後、肝酵素活性値及び銅濃度の平均値と個体毎のばらつきの減少が認められました。銅濃度は、1 か月後には正常範囲内に回復しましたが、肝酵素活性値の回復には約 5 ヶ月間を要しました。また、5 カ月後においても GGT の平均値は正常範囲上限の約 2 倍の数値を示し、肝機能の回復には長時間を要することが考えられました。



【 成績の活用 】

※ 点線：正常値上限

めん羊飼養農場への注意喚起。